

第11回
企業インタビューThe 11th Interview
with a Corporation

◆インタビューア—

—編集委員—

國本 学史
井澤 尚子

「CUDOは虹の架け橋」

CUDO as a Rainbow Bridge.

NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構

今回の企業インタビューでは、カラーユニバーサルデザイン (Color Universal Design, 以下CUD) の啓発を通じて、「誰もが暮らしやすい社会」の実現を目指す。NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構 (以下CUDO) 様にオンラインインタビューを行いました。昨今は、ジェンダーレスの時代と言われ、社会における色彩の意味づけが変化しています。LGBTQを始め、個性や特性が特徴的・少数であることを理由に社会環境から排除するのではなく、全ての人が、共に社会を構成する役割を持つ存在と認識されることが目指されます。色覚に障がいを持つ人々の特性は、個々人の色彩の多様な認識の違いとしてあらわれるものと言えます。ある特定の色の識別に苦勞する人々にとって、より分かりやすいデザインや表現の形で、示されるサインなどを変更することは、色の識別に困難を抱える人だけでなく、誰にとっても見えやすいデザインとなる可能性が高くなります。多くの人にとって、暮らしやすい社会をもたらすカラーユニバーサルデザインを追求する、CUDO様にお話しを伺いました。

■NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構



CUDOロゴマーク

カラーユニバーサルデザイン機構は、社会を人の色覚 (色の感じ方) の多様性に対応、改善してゆくことで「人にやさしい社会づくり」を目指して2004年に設立されたNPO法人です。科学的で実用的な「カラーバリアフリー」の助言を行い、幅広い理解を求め継続的な活動を行うために「特定非営利活動法人 Color Universal Design Organization (現在のカラーユニバーサルデザイン機構、略称：CUDO)」が設立されました。

※ロゴ・文章はCUDO様Webページ・刊行物等より許可を得て一部転載

【ご出席者】(インタビュー時のご発言順)

●伊賀 公一氏

CUDO 副理事長・常勤理事
P型色覚, 色覚の自由研究者

1955年徳島県生まれ。早稲田大学在学中にヒッピーをしていたが、米国で起こったパーソナルコンピュータ文化に傾倒し大学を中退。アップルコンピュータ代理店の役員やベンチャー企業の役員を経てCUDO設立に参画、一級カラーコーディネーター、大学の特任講師としてCUDを普及中。

●武者 廣平氏

CUDO 理事長, プロダクトデザイナー
C型色覚

1999年ユニバーサルデザインフォーラム創立より理事としてUD啓蒙活動に注力。2004年CUDO創立。JDB (日本デザイン事業協同組合) 副理事長。PFA (一般社団法人フェーズフリー協会) 調査・研究委員会委員。JIDA (公益社団法人) 日本インダストリアルデザイン協会 (旧日本インダストリアルデザイナー協会) 環境委員会委員

●田中 陽介氏

CUDO 副理事長・常勤理事
D型色覚

1968年神奈川県生まれ。1990年専修大学経済学部卒業、Long Beach City College中退。東京商工会議所カラーコーディネーター認定講師 (2級)、米国FAA Private Pilot certificate及び運輸省自家用操縦士技能証明、小型船舶1級免許保有。

●伊賀 星史氏

CUDO 事務局常勤CUDコンサルタント
C型色覚

1983年徳島県生まれ。立正大学地球環境学部卒業。フォトグラファー・教科書会社のユニバーサルデザイン担当デザイナー・CUDO専任CUD講師、Jリーグゲームデザイン担当、新規事業分野、担当実績：印刷機器、防災マップ、電車車輛表示器など。

**貴法人の立ち上げの経緯と沿革についてお聞かせください**

国立遺伝学研究所におられた岡部正隆氏、国立基礎生物学研究所におられた伊藤啓氏、二人とも遺伝を研究をされていたP型色覚の当事者ですが、お二人が「カラーバリアフリー」を社会に訴えはじめました。別の色覚の団体で新型LED信号機実験の被験者集めをしていた田中陽介氏が岡部氏に参加を呼びかけ、伊藤氏も加わっていただきました。当日、実験終了後に、色彩学会に所属されている市原恭代氏（現在工学院大学）を田中氏が紹介したのを切っ掛けとして交流が始まり、伊藤氏の案で団体を作ることになりました。

岡部氏の高校の先輩でありユニバーサルデザインに造詣の深いデザイナーの武者廣平氏、田中氏と同じ団体の伊賀公一氏が加わり、岡部氏、伊藤氏のカラーバリアフリーに賛同する研究者等が設立時社員となり、2004年10月にNPO法人が設立されました。

**貴法人の理念などについて教えてください**

特定非営利活動を通じて、色覚を理由に「誰かが困ることがない」社会の成立、少数色覚者・多数色覚者の誰もが、安全で暮らしやすい社会を作っていく、ということを目指しています。

CUDOは、色覚の違いや色の感じ方の個人差を問わず、できるだけ多くの方が暮らしやすい色社会を作るために、個人や企業・団体などにご支援を呼びかけ、共に活動を広げていきます。また、日本の各地、世界の国々で活動する志を共にする各団体と協力し合い、CUD普及活動をサポートいたします。

当初団体を作ったときには、カラーバリアフリーという言葉を使っていました。現実的には社会にはバリアばかりで、それを取り除く必要がある状況でした。しかしむしろ、最初からバリアのないように、困っている人だけでなく誰もが困ることないように、という目的で、CUDという言葉を用いるようになり、活動を続けています。

**事業内容についてお知らせ下さい**

人間の色覚の多様性に対応し、より多くの人に利用しやすい配色を行った製品や施設・建築物、サービス、情報を提供するという考え方を「カラーユニバーサル

デザイン（略称CUD）」と呼びます。我々は事業として、色覚障がいに関する知識の普及啓発が一番大事なことになります。ベースとして、「色がどう見えているか」ということが分からないと対応できません。この関連の研究や、研究結果を受けて、団体や企業への情報提供・提案なども行っています。

CUDは、特定の「P型」「D型」の色覚障がいを持つ人に対応すれば良い、ということで終わらないので、様々な実物検証を行う必要があります。一般的に、「隣にいる人はどのように色が見えているのか」ということを知らない人が多いです。たまたま色覚障がいの当事者であったり、少数色覚者が身の回りにいたり、ということがないと、「色の見え方の違いが分からない」、ということが多いです。例えば、赤が緑に見えるような特性を知っている人は、世間では少ないと言えます。ですので、色の見え方が異なる個性があることを、社会に啓発していく必要性があります。



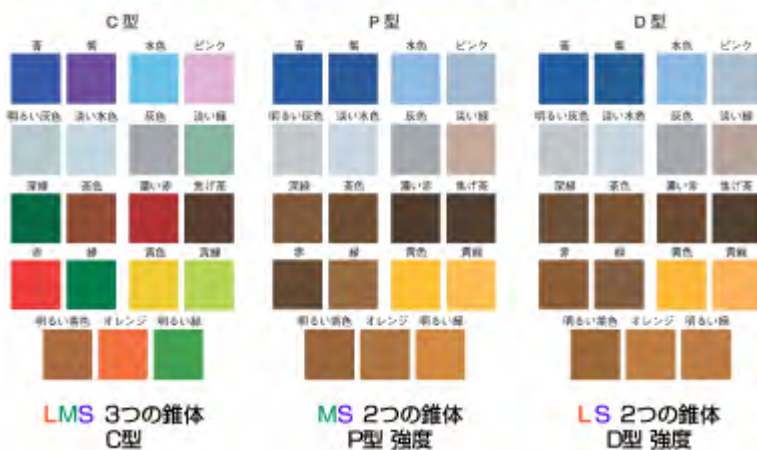
CUDに関する調査研究の様子
出典：「CUDO団体案内」より

**カラーユニバーサルデザインとは？**

そもそもCUDとは、「カラー」＝「色（可視光線が目から入り脳で起こる色知覚を示す言葉）」＋「ユニバーサルデザイン」＝「普遍的な、全体の」を示します。

人はそれぞれ、生まれ持った色の見え方が違います。人間の生まれつきの色の感じ方（色覚）は、大きく5つの型（タイプ）に分けることができ、色の感じ方が異なります。また、色覚は病気や老いによって変わることもあります。人々のそれぞれの、「異なる見え方」に対応したカラーを考えていくことが必要です。

色覚のタイプによる色の見え方のちがい



C型・P型・D型色覚における色の見え方の比較
出典：CUDOのWebページ「色覚型と特徴」より

などのための、社内勉強会・社内CUD問題把握のための合同点検の開催、CUDヘルプデスク開設などでも協力しております。

できるだけ多くの人達にとって安全であり、メリットを与えるもの、という指針を示すことを目指しています。少数色覚者は大きな対象ではありませんが、一般の人々にとっても、例えば加齢により白内障になる人も、色は見えにくくなります。少数色覚者は白内障が重なればさらに大変です。つまり、できるだけ多くの人にとって分かりやすい色を示すことは、商品開発を行う企業にとっても、商品開発などに際して多くの顧客に対応できることとなります。これは、企業にとって、参入障壁が減じることに繋がります。



CUD 認証とは？

CUD 認証は、CUDOが行う第三者認証です。このCUDマークは、CUD認証を取得した製品に「色覚の多様性に対応していることを保障する証」として表示することができます。CUDマークの表示は「人にやさしい社会づくり」に貢献している企業姿勢を示すものでもあり、CUDに対応されていない製品に対して、差別化を図ることができます。この認証を受けた製品・道具・デザインは、利用者が安心して利用できる、となることを目指しています。

CUD マーク見本(検証合格年右上表示)



CUD マークは、NPO 法人カラーユニバーサルデザイン機構により認証された製品に表示できるマークです。

出典：CUDマーク見本『CUDガイドブック』より



CUD 認証等を含めた企業等との連携など

賛助会員の企業が63社あります。過去に啓発普及イベントや、CUDデイズなどを開催しています。これからは、少数色覚者の作品展示への協賛・協力なども目指しています。

昨今は、企業自身がCUDを進める意図を持つようになりました。企業側のCSR、CSアップ、SDGs達成



CUDを実現するために活用できるツールなど

日常で使用できるものを大別すると、二つあると言えます。

一つは、「どのように色が見えているか」をシミュレーションするツールです。もう一つは、推奨配色セットのような、カラーバリエーションを取り込めるようなツールです。

Adobe社用のアプリケーション(ver.CS4以来アプリケーションに内包されている)や、スマホのアプリなど多数あります。ゲームの開発エンジンであるUnityなどにも、カラーに関するツールは含まれています。バリエーション(伊藤光学工業株式会社)などの眼鏡型のツールは、印刷出力したカラーを確認する際に活用できます。昨今、インターネットの動画などで話題になることが多いような、色覚に障がいがある人が掛けることで、色が見えるようになる(2色覚の方が3色覚のように色を認識できるようになる)眼鏡ツールは、残念ながら十分な効果を広くもたらすことは難しいと言えます。ただし、特定の見えにくい色を見分け易くするための眼鏡ツールなどは、昔から存在しています。問題は、そうした眼鏡・コンタクトレンズのようなツールを使わないと、一定の色覚検査や、職業上の職務遂行における制限基準等をクリアできない社会的環境がいまだに残っている、ということです。

こんにちでは、スマホなどに便利な補正的なツールが様々にあります。例えば、上記のように、少数色覚者に、多数色覚者の色の見え方を完全に再現することはできない、という限界はあります。ただ、手軽に使

えるスマホのアプリなどには、補助的な役割を果たすアプリがあります。例えば、P型色覚の人が特定の色を認識できない場合に、その色を撮影すると、C型色覚を持つ多数色覚者が、通例ではどんな色名の色か、またマンセル値で示すとどのような数値になるか、などを示してくれるアプリなどです。

デジタルのアプリやツールは、将来的にも補助的な働きをしてくれるものが期待できます。しかし同時に、そこまでしないと、「色覚に障がいがある人にとって不便な物事が社会には多数ある」という現実でもあります。



CUDOに関する普及啓発の様子
出典：「CUDO団体案内」より



CUDと社会との関わり

かつて、色覚障がいを持つ当事者自身が、色がどう見えている・見えていないのか、ということを知ることができていない時代がありました。日本では、色覚検査がとてつ大きな影響を持っていた時期があります。昭和27年～昭和34年頃までの中学校の保健体育の教科書に、「色盲(ママ)は悪い遺伝病」「結婚せず仕事にも就かない方が良い」とまで書かれていたようなことがありました。また、色覚の「遺伝」についても書かれていました。そうした背景のもと、就学しているほぼ全ての児童に色覚検査をしていました。つまり、色覚に障がいを持つ子の保護者や親族は、当時、色覚の障がい遺伝するという言葉に非常に悩むことになりました。少数色覚者当事者も周囲の人々も、「悪い」として扱われる、辛い環境があったと言えます。いまはこうした考え方はほとんど無くなりましたが、警察官や消防士などに就職するに当たっては、色覚に関しては一定の制限が残っている部分もあります¹⁾。

色覚障がいを持つ人は、特定の色の見分けが苦手であ

っても、かえってその他の色の見分け方に関する能力は高いケースがある、というような研究結果も出てきています。色彩学会で発表される研究論文にも、そうした報告が見られるようになりました。人々誰もが、能力や個性の違いを活かせるような社会、つまりC型・P型・D型色覚者いずれの色覚を持つ人同士も共存共栄していける社会を築く方が良いということが、科学的に検証されていくことが必要であると考えています。これは、多様性を尊重する、ということであると言えます。



『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットガイドブック』について

社会との関わりでは、『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットガイドブック』があります。同ガイドブックは、「カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット制作委員会」のもと、東京大学(分子細胞生物学研究所、脳神経回路研究分野)の伊藤啓氏(CUDO副理事長)、社団法人日本塗料工業会、DIC株式会社(DICグラフィックス株式会社・DICカラーデザイン株式会社)、特定非営利活動法人カラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)、石川県工業試験場の前川満良氏、といった、複数の組織・機関のご協力のもと、何年もかけて作成したものです。

当ガイドブックに示される色の例として、22色が選ばれています。それぞれの色は、日塗工色票番号・CMYK・参考マンセル値・RGB、によって示されます。配色としては、最大で6色の組み合わせが提示されますが、「あらゆる状況の人にとってこれでよい」という、ベストの配色ではありません。印刷表示のとき、ディスプレイ表示のときなどの条件によっても異なりますし、全ての色覚タイプの人にとって完全に望ましい、という配色はあり得ません。なるべく皆にとって、認識し易い配色は何か、という制限の中で、色覚のタイプが異なる人々が、お互いに譲り合うことも必要である、という但し書きが記されています²⁾。

色を表現・示す企業・団体・組織が、配色の選択について、毎回CUDOに確認するのは大変です。しかし、ガイドブックの配色を使用することで、提示・表現する側が示すカラーデザインを、「できるだけ多くの人にとって分かりやすい」配色とすることができるようになります。そのための参考となるサンプルを示すものとして、当ガイドブックは役立つものになっていると言えます。

ガイドブックの配色例が活用されている具体事例としては、阪急電鉄の路線図や、アロン化成株式会社のゴミ箱製品、官公庁における壁面誘導表示、などがあります。



教育機関、子どもさん向けの啓発など

まず色覚の話から入る必要があるのですが、子どもさんたちに分かりやすい説明を行うことを心掛けています。特に子どもさんたちの中には、色覚障がい当事者がいらっしゃる場合があります。そのことを、お子さん自身や周囲の方に理解していただく必要があることもあります。説明の方法としては、『カラーユニバーサルデザインって何だろう』等の冊子をお渡ししつつ、クイズやゲームなどを通じて、理解してもらうようにしています。教育機関のイベントや授業に招待いただき、関連の機会を通じてCUDの啓発に努めています。

自治体や公共施設で行われるイベントや、職業体験イベントなどでも、分かりやすい説明と体験を通じて学んでいただくことを試んでいます。

小学校の子どもさんは、4年生ぐらいですと、色覚やCUDに関する知識について理解をしていただけるようになり、気をつけよう、という意識を喚起することができると思います。もっと小さなお子さんたちには、バリエーションなどの眼鏡ツールを用いて、色覚の違いを体感していただきます。さらに親御さんたちに対して、知識や情報をお伝えすることで、色覚やCUDについての理解を深めていただいております。

皆さんに、「分かる範囲で、分かるように」知っていただくことが重要だと思います。CUDというのは、まだ社会に絶対的な基準があるものではありません。ですので、「こうしたら良いかもしれない」、「これについては知っている」という認識が、多くの方にまずできることで良いと思います。



CUDと安全性・利便性

色の誘目性や判別性による安全への寄与は、大きいです。ところが、これが人によって目立たない、判別ができないとなると、安全で安心な社会を維持することが難しくなります。むしろ、「ここまで色覚の違いやCUDについて理解されていないのか」と驚くような色表示が、こんにちでもなされていることがありま



発行・監修/NPO法人 カラーユニバーサルデザイン機構
 〒101-0021 東京都千代田区外神田二丁目14番10号 第二電波ビル7階
 問い合わせ先TEL: 03-6206-0678 /メール: info3@cudo.jp /ホームページ: http://www.cudo.jp/
 制作者/後方 始

出典：「カラーユニバーサルデザイン」って何だろう？
 発行・監修カラーユニバーサルデザイン機構より

みんなで色を選んだり、工夫をする、
 みんなに読みやすい物や、使いやすい物、便利な物が生まれるよ。

色の見え方は、ひとりひとりちがうので、わかりやすい色の組み合わせはちがうんだよ。だから、みんなで色を選んだり、工夫することも大切なんだ。

★6つの色のちがう入れ物に、「しお」と書いてあるよ。みんなに読みやすい色で、書かれているかな？

ほくは、「しお」の文字が、読みにくいよ。

みんなで色を選ぶと、みんなにわかりやすくなるよ。

- 1、「こい色」と「うすい色」を組み合わせると、文字が読みやすくなるよ。
- 2、形を変える工夫をすると、入れ物のちがいも、よくわかるようになるよ。
- 3、色の名前を書くと、便利なこともあるよ。

分かりやすく図解される色の見え方の違い
 出典：「カラーユニバーサルデザイン」って何だろう？より

す。例えば道路のペイントなどで、道路のレーンや方向の指示について、色分け表示をメインの方法として示されてしまっていると、特定の色の見分けが困難な人は、色を見分けられないことのために十分な指示を読み取れず、交通上のリスクを生じさせることになり得ます。

50年以上前頃の色覚制限の厳しかった時代には、色を変えるのではなく、色覚検査をすることで、少数色覚の人を安全にかかわる仕事に就けなくするという方法により、安全を担保しようとしていました。当時は明るい青色のランプなどもなかったので、やむを得なかったことも理解できます。しかし現在は、低価格で青いランプでも作るできるようになっています。

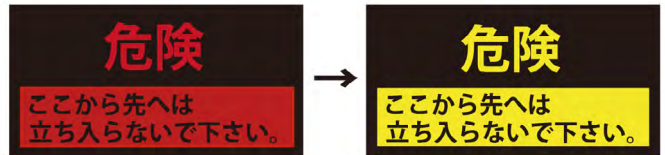
多くの人が関わる、各種の物の色を、多様な色覚に対応するデザインにすることで、制限によって少数色覚者を排除するのではなく、多数型色覚者にとっても誰にとっても、社会が便利になっていくと言えます。

CUDの手法では、少数色覚の人だけが色を選定しているわけではありません。その商品やサービスを使用する上では、多数色覚型の人でも利用者です。色を決めていく際には、多数色覚型の人でも参加して色を微調整します。なのでCUDの実施において、マイナス面はないようにしています。そうするとプラス面は何かということですが、人は一人だけで生きているわけではなく社会生活をするものなので、自分一人だけがわかりやすければ良い、ということではありません。生活空間を共有する誰もが、わかりやすい色になっていたほうが良い、と言えるのです。

CUDOの理事が2018年JIS安全色の改訂原案作成委員に選ばれ、CUDOは改善のための調査や検証に協力しました。2018年からユニバーサルカラーを採用した安全色の赤・黄赤・黄・緑・青・赤紫があらたに策定されたことは、社会にとって非常に大きな出来事と言えます。

指示書きや看板表示などが、見分けやすい色・分かりやすい色に修正されることは、述べてきたように、少数色覚者だけにメリットがあるわけではありません。少数色覚者でなくても、分かりやすい色・見分けやすい色の方が、より簡単に表示を見分けることができるのです。小田急電鉄では2015年よりカラーデザインを見直し、非常停止ボタン誘導サイン・駅係員呼び出しインターホン本体表示ならびに誘導サイン・掲出用時刻表・路線図・特急停車駅・料金案内・注意事項掲示が、CUD認証を受けています。例えば、色覚障

がいのある人が非常停止ボタンを押し易くなれば、色覚に障がいがない人にとっても安全性が高まる、つまり誰かが危険な状況に陥った際に、それに気付ける人の数を増やす、ということに繋がります。上記のデザインを採用した小田急電鉄は、2016年にグッドデザイン大賞を受賞しています³⁾。



文字が背景に溶ける色で表示されると、特定の色覚を持つ人には読めなくなる可能性がある
出典：「CUDO団体案内」より



非常停止ボタン誘導サイン
小田急電鉄ホーム
出典：「Season in the CUDO」(23)夏号 2018より

異なる色覚の人との色名の共有や、色の違いをどのように意識すべきでしょうか

これは、あるものの定義が一般性が特殊性か、ということに該当すると思います。色名は、まだ多数色覚の人が定めたものしかありません。共有化すべき少数色覚型の人にも通用する色名が、まだ無いのです。その状態で色名には一般性が有ると思ってしまうと、大失敗することがあるということを知るべきです。

例えば片言の英語が話せる日本人が英語圏に旅行に行くと、言いたいことが通じず困ることがあります。世界の人が皆同じ日本語を話すのだ、と思っていると大失敗するわけですが、それと同様に今の色名は一般色名ではなく、C型だけで通じ合う特殊色名であるということを知らないといけません。

C型色覚を持つ人にとって、赤に見える色を赤色と呼ぶとして、それが別の色覚者にとっては同じ色に見

えないのに同じ色名で呼ぶのが前提になっています。

色の違いについても同様で、色の距離感が人によって大きく異なっているものだ、ということは小さなうちから知っておく必要があることです。

Q 新型コロナウイルスとCUDについて

社会では在宅業務が多くなり、オンライン会議なども増えてきました。紙でのやりとりが減少し、デジタルに移行しています。そうすると各種のUIやDX関連の色覚対応が増加します。

例えば、東京都の新型コロナウイルス情報構築サイトGITHUBでオープンな情報がやりとりされる中、グラフなどの色使いについて多くのプログラマーがやりとりし、どうすれば良いのかを知りたい、と言うことで参加要請をもらいました。ひとりのCUDO理事が、プロボノ(分野の専門家ボランティア参加する人)として参加し、CUDについて説明し、提案された色の内容について検討と微調整をした色を提供しています。この全課程は公開されており非常に勉強になると評判になっています⁴⁾。

Q メディアとCUDについて

眼科の分類では日本人男性の20人に1人、白人男性では12人に1人が、少数色覚型です。さらに、残りの方たちの色の見え方も様々であり、実際には垣根を作ることがおかしなことと考えられます。公共放送・ネット情報では、広範囲な利用者が想定され、特定の人たちだけに伝わる情報は、選ばれなくなります。また近年非常に短時間で情報を提供し、また理解することが求められる風潮があります。このようなときには、色を使用することが多いです。しかし、利用者には多様な色覚を持つ人たちが想定されるため、CUDに対応することは、当たり前のことと言えます。

Q 貴法人にとって、「色」とはどのようなものでしょうか、また活用についてどうお考えでしょうか

色彩の活用方法には2種あると考えています。一つは感情制御するための配色、そして情報制御するための配色です。CUDOが多様な色覚に対応すべきだと考えているのは、後者の情報制御のための配色技術です。

CUDOは一般向けの商品開発をする組織ではありません。今後は、普及啓発事業を強化しCUDという

考え方をより広く広めるための様々な事業を展開し、CUDに関する普及活動を、CUDOに代わってやって頂ける方々の育成をしたいと思えます。またCUDMSというCUDO以外の団体が、CUD認証を行うような仕組み作りがありますが、こうした方法の再定義や拡大を考えています。

特に、少数色覚型の子どものための色彩教育の方法を提供していきます。

Q 色覚障がいから色覚多様性へ(※日本遺伝学会「遺伝学用語」改訂などの動きについて)

「Color Blindness を色覚異常」とし「正常色覚と色覚異常がある」という考え方から、「多様な色覚がある」という考え方に変えた、という表明であったと思います。進化生物学の最近の知見によっても、そのようにとらえられています。当会は、結成以来そのように考えてきています。

色覚異常や色弱という言葉は使ってはいけないのか、ということではないと言えます。色覚は、多様であるのは当然のことです。劣る・少数である、だから排除しなければならない、というような適者生存的な考え方として、色覚に障がいがある人の色覚の能力が劣るのではありません。色覚の型が異なることで、社会的な不利益を被るようなことがあってはならない、というのは当然です。

Q 日本色彩学会、日本色彩学会員へのメッセージ

色覚研究会の存在はたいへんうれしく思っています。全国大会・研究会大会でも、多くの研究者が色覚で論文を発表されていて、とても参考になります。

色彩学の歴史が多数色覚の色の見え方をベースにしており、異なる色覚の人をベースにした場合色覚型の数だけ(つまり無限に)、多次元の色彩論が新たに展開されてゆくでしょう。前段に述べた特殊解か一般解かという話と共通です。誰もが自分の色の見え方に誇りをもって生きられる社会にしたい、と思えます。ぜひご協力ください。

日本色彩学会の会員の方には、最新の科学的な色覚の多様性に関する情報や、進化生物学上のヒトの色覚の多様性の意味、CUDに関する正しい情報について、知っていただきたいと考えています。

各種イベントや教育普及活動のご後援や共催などで、今後コラボレーションができればと思います。

取材：2022年9月12日

東京都千代田区

NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構

インタビューは、オンライン形式で実行

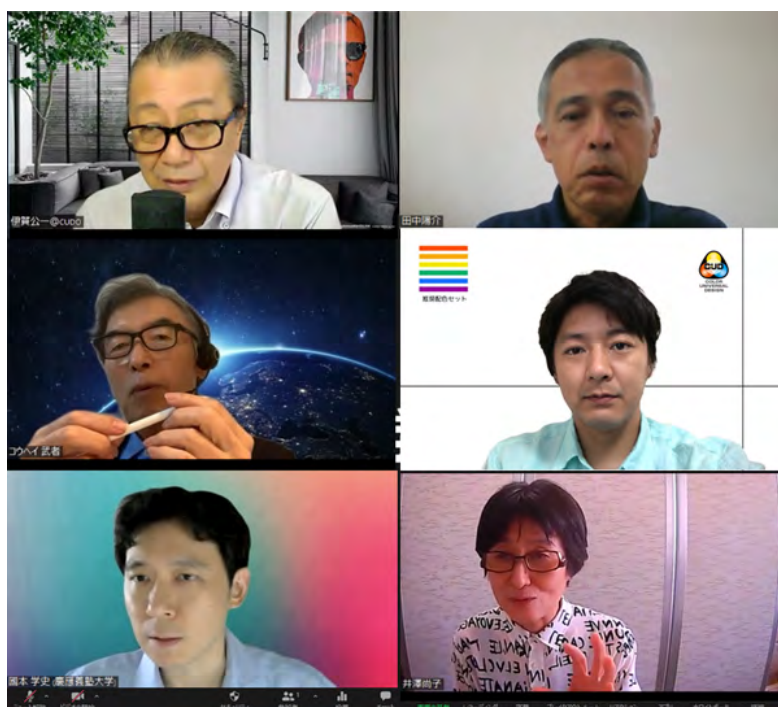
[注]

1) 令和4年(2022)現在の、警視庁警察官採用試験案内では、色覚/聴力の項目に「警察官としての職務執行に支障がないこと」と記述されています。ただし具体的な基準については、明記されていません。こんにちでは、制限などが緩和されつつあると考えられますが、少数色覚者に対する職務上の配慮や、特性を活かした業務への従事など、特定の業務に携わる人々皆にとって、良い環境がもたらされることが望まれます。

2) 『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットガイドブック』には、「本配色セットは、多様な色覚に配慮してお互いに少しずつ譲り合い、できるだけ多くの人にとって比較の見分けやすい配色になることを目指して色を選定しています」と書かれています。

3) 「駅構内業務掲示 制作プロセス [「誰にとっても見やすい業務掲示を！」小田急電鉄 業務掲示カラーユニバーサルデザイン化への取り組み]」2016年度グッドデザイン賞
<https://www.g-mark.org/award/describe/44523>
 [2022年9月14日閲覧]

4) チャートのカラーをアクセシビリティを考慮した色へ変更する
<https://github.com/tokyo-metropolitan-gov/covid19/issues/1172>
 [2022年9月14日閲覧]



CUDO オンラインインタビューの様子
 上段左から、伊賀公一氏、田中陽介氏
 中段左から、武者廣平氏、伊賀星史氏
 下段左から、國本学史、井澤尚子